



溪々文集

前編

中村俊定文庫
文庫 18
262
1





亭



去之又玄象妙之行淡之又淡名味

之至深者四揚以之云揚一以德顯

一以位彰名同實之實實豈不符

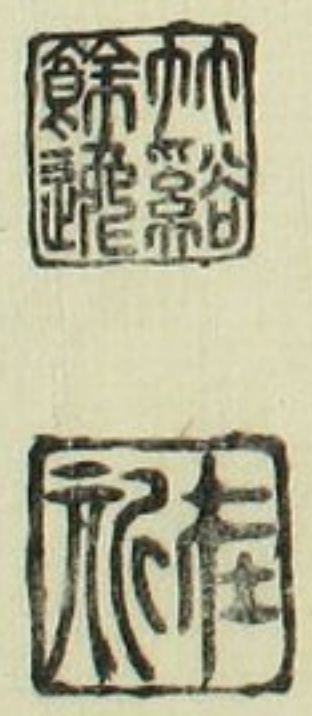
於名吾後三揚子侯之者先知其名

如三揚子者故謂之雄也其原出於



者一^{ナリ}大劇場也^{ナリ}造化者大劇^{ナリ}也^{ナリ}
 多物者生^{ナリ}未^{ナリ}終^{ナリ}日^{ナリ}也^{ナリ}死生得^{ナリ}失^{ナリ}哀^{ナリ}
レテ ワキ トウケ ヲニカク
 乐^{ナリ}荣^{ナリ}枯^{ナリ}者^{ナリ}演^{ナリ}割^{ナリ}也^{ナリ}高^{ナリ}場^{ナリ}歌^{ナリ}陶^{ナリ}雅^{ナリ}
シクミ カサリ
 俗^{ナリ}有^{ナリ}世^{ナリ}之^{ナリ}腐^{ナリ}儒^{ナリ}士^{ナリ}以^{ナリ}括^{ナリ}肉^{ナリ}孔^{ナリ}
 口^{ナリ}谈^{ナリ}之^{ナリ}高^{ナリ}自^{ナリ}標^{ナリ}果^{ナリ}以^{ナリ}為^{ナリ}得^{ナリ}龍^{ナリ}法^{ナリ}
ラフ メイト
 自^{ナリ}我^{ナリ}親^{ナリ}之^{ナリ}作^{ナリ}亦^{ナリ}惟^{ナリ}戲^{ナリ}也^{ナリ}也^{ナリ}也^{ナリ}也^{ナリ}也^{ナリ}也^{ナリ}
ラ ト ト ト ト ト

之^{ナリ}戲^{ナリ}亦^{ナリ}戲^{ナリ}耳^{ナリ}文字^{ナリ}神^{ナリ}游^{ナリ}戲^{ナリ}之^{ナリ}味^{ナリ}於^{ナリ}
 揚^{ナリ}之^{ナリ}文^{ナリ}亦^{ナリ}能^{ナリ}如^{ナリ}是^{ナリ}親^{ナリ}
 寬^{ナリ}保^{ナリ}亦^{ナリ}百^{ナリ}星^{ナリ}夕^{ナリ}集^{ナリ}澹^{ナリ}玉^{ナリ}舟^{ナリ}楫^{ナリ}



序



物茂卿譏和歌云三十一字殊
 離之言不足道蓋東人而華其
 後者固一家之耳。而伯陽嘗語予
 曰。由及凋傷。楓林美則員矣。
 不如我猿。乃夫紅系。若吟供人。

易感之為愈也。伯陽善善音
綜情之深林。其品不出於心。下
而之云也。如此。可謂不言者哉。夫
俳諧者。古國風之一體。降而為今
之俳諧。亦已尚矣。物與人異。藝與
詞長。乃能轉俗于雅。操雅于俗。目

中無不可象之景。心曲無不可說
之情。上可以告

玉皇天將。下可以諭牙伶。屠兒亦
一將。以海也。願佐陽意中人。
此論已段令公之見。不覺欣
然。如願。曰。勝讀窮措大。初學詩。

矣。孰謂^カ浩^フ之道^{クダレトヤ}。汗^{クダレトヤ}亭^ヤ。三楊氏少^ク
 從^テ東都寶晉子^ニ學^ラ。浩^フ之^ヲ煉^ル句^ヤ也。
 去^テ皮^ヲ得^ラ骨^ヲ。太^テ骨^ヲ乃^チ髓^ヲ。奇^{ナク}如^ク天^ノ吳^ノ
 九^ノ首^ノ卷^ノ潮^ノ。一^ノ噴^ク玉^ヲ。幻^{ナク}如^ク術^ノ士^ノ教^テ
 黃^ク魚^ノ鱗^ノ黑^ク巢^ノ。不^レ見^ル之^ヲ。終^ク銳^ク而^シ可^ク
 畏^ル。如^ク老^ノ袖^ノ。接^レ人^ヲ。隻^ニ如^ク射^テ倒^ル塵^ノ中^ニ。

為^ラ豔^シ而^シ可^ク怜^ム。如^ク雛^ノ妓^ノ。携^テ老^ノ枝^ヲ。近^ク
 教^ラ眼^ヲ。終^ク亦^モ能^ク出^ル。太^ク太^ク為^ル原^ノ
 古^ク浩^ク寸^ノ哉^ニ。日^ノ晋^ノ子^ノ。浩^ク歎^ク海^ノ内^ノ景^ノ
 復^ク。又^モ能^ク屬^ス浩^ク。又^モ不^レ著^ク。如^ク柑^ノ集^ノ。以^テ
 于^テ世^ニ。惜^ム乎^カ。人^ノ亡^ル。梨^ノ存^ル。寒^ク。乎^カ。不^レ復^ク
 少^ク矣^ニ。三楊氏克^ク。終^ク志^ヲ。每^ニ與^ニ至^ル。

輒修^テ又^ニ辭^ヲ以^テ自^レ樂^ム。英^ニ華^ニ精^ニ彩^ヲ。亦
借^ク餘^リ也。昔^ニ宋^ノ大^ノ尉^ノ袁^ノ洲^ノ采^リ文
章^ハ人^ノの^ハ笑^ラ者^ラ次^ニ而^テ名^ヲ曰^ク借^テ
集^ト蓋^ク又^ク孝^ニ而^テ借^ニ言^ス者^也。亦^カ東^ノ人
假^リ女^ノ字^ヲ寫^ス男^ノ揚^ラ者^也。徒^ニ然^ル字^ヲ爲^テ最^ト
而^テ采^リ白^ノ集^ノ殿^ノ之^ニ皆^ク以^テ源^ノ語^ヲ枕^ク州^ノ爲^テ

蓋^ク本^ト而^テ潤^ク名^ス之^ヲ未^ダ嘗^テ少^ク借^ニ言^ス
者^也。晋^ノ与^ハ楊^ノ則^ク借^ニ言^ス而^テ又^ク孝^ニ烏^ト
者^カ非^カ邪^カ。予^レ冠^ニ緋^ヲ而^テ佩^ヒ史^ノ公^ノ宣^ニ尼^ヲ
而^テ娘^ハ迦^ハ文^ヲ。迺^ク詩^ヲ餘^ヲ乃^ク
借^ク奇^ニ。乃^ク和^ク歌^ヲ。乃^ク借^ク性^ノ靈^ノ。彼^レ數^ニ
莫^ク不^レ染^ス指^ヲ。以^テ友^ニ子^ノ。お^テ借^ク社^ヲ爲^シ金^ニ

一海軍之弁部小能之字又李吟增山の井四季の所
能之字以又能の字事方不所り給交

一羅人智以百教之序子批青香子没後準的依コレ
と如く風流滅しとりの教十年と所り十年と所

一其ハ先師之時ハ奈香而已して其意空へハ教十年とハ
今日と云りハ能語消長と所り今羅人時子新

一志を立つと所り序政を選志を登る事如うとをさ
一世を極するハ如く事と所り門下と祠宗と如く子

一能子替り所得下ハ
一源氏とと奈教句小つと云ハ小字記ふ如く可一詞

佳境を不接百くたつと所り志本之志を矢ハ如か
可也

一師通と云も事と云を師通と云者多し一師通が名高き
者如れハ才子必上と云も如し一能人之千と才

子諸る如く四又人と云へ一下と此師通おも上と有之の
あり先ハ如し一監取折下惠と云と肉才不は居如

も性ふよとへ一上と此才子小下とも多くとん空へハ
右六ヶ乗取と云

返事 上下略

是れ有て字は非此も亦と云事之家長等死に云路競馬と云尋凡願下答と

是れ有て字は非此も亦と云事之家長等死に云路競馬と云尋凡願下答と

可ううのりやわいひあうこたへくめとあふこおあふ
 心のきうきよめやう句やうりやあふこのあうり又きよ
 行雲のりや馬系かなやうり一原氏か敷多しり
 毛雷もこれせんうり又きよこ八原氏ふうりてハ天皇又きよ
 ときへ一用うりやうりあつていりどめあうりあ
 とあうりやあうりあうりあうりあうりあうりあうりあ
 いやあへんあうりあうりあうりあうりあうりあうりあ
 又きよもさへ一さうりあうりあうりあうりあうりあうりあ
 をりてあうりあうりあうりあうりあうりあうりあ
 又きよもさへ一さうりあうりあうりあうりあうりあうりあ

又きよへ一と又朽老きくちあうりあうりあうりあうりあ
 して一派のりあうりあうりあうりあうりあうりあ
 古なるりてもさあうりあうりあうりあうりあうりあ
 老舟波屋日く是を乞で不正病老あうりあうりあうりあ
 明ふ志のあうりあうりあうりあうりあうりあうりあ
 ちうりあうりあうりあうりあうりあうりあうりあ
 東の舟休家の字よるあうりあうりあうりあうりあ
 ちうりあうりあうりあうりあうりあうりあうりあ
 半うりあうりあうりあうりあうりあうりあうりあ
 船中の船窓あうりあうりあうりあうりあうりあうりあ

の序を市本字に改む 光慶の魯山と銘小

石と石也 意旨如何 堅事間不容髮 噴
相用事 武士と甲冑山伏と 兜巾

とらきけて 床の上おそついでしる之千
世界九千八海

馬子判

是より魯山の極意海了也

淡々文集卷第一

目録

- 一 飯のしるふ家
- 二 相飲を耐す時
- 三 歩草の経
- 四 城西北坡小船茂流小
- 五 雑話 盗人と禪
- 六 志波州
- 七 楚八四日経渡
- 八 東賀へおく家

九 惠南律師稀年如久

十日 春日首茂初一人子酬ふ

十一 琵琶湖

十二 雜詠六章

十三 續鼻禪を留辞

十四 陸珠旅宿へ送る文

十五 紀陽分樹亭へ小抄ふ

十六 竿杖を道るころ葉

十七 病卧并観賣

十八 富天子のおくゑ示教

第一 飯乃辞

眼小愛し耳をうらふ者。鼻うらふの——喉吻シを
 ちく支。茶小灸す酒は蓮ふ。や戸切らき寸の板
 毎就慕ふ。初音紫舟押わらわて。すくとひは好
 むと名つけし品を垂し。今古風流すツキカ培ふと
 是皆心をまふ境あり。寂小瞬も亭の如し
 従来飯を物して至して好可。されば百費徒
 芋かいら哉喰画——さるハ。独るさあさ腹うち
 多うた意を物す。如く。取らハ。物く言尚
 ふ——異なり。け若し——至て精く登る者

瞬七亭ハ
大津、角上也

百費、芋ハ
徒持州

ふもつひ。味むハ忍云ハ業云ある人れ言ふイハ。
 あてなり敬のきふ。志ふ交ニツ三ツ倦うして阿者
 うらた寝哉と。むらう去地神方居へ。おちくとみつ
 うら音して静ふ走り。自おさす。又娘めて。心せ
 うふ暖る小笠。高安の女も此め。小飯じと。た
 さけうふんくら。うさ。器控う。凝ら
 きて。いひりり山のや戸極。飯顆山頂の夜雪嵐ふ
 飛つと。四季折の野菜お煮て居。ちう孫ち
 うくおあて傳へ。粧さる。体して。体ん。嗟也と
 ちとのを。お。ぬ。人。多。一。梳。さ。ハ。や。う。ふ。二。梳。手。許

古あめ女
 いとお夜

居士八四休
 居士也

の清うをを拂ひ。三梳。嵐のさく。を。と。め。一。勺。た。ち
 まらぬ。こ。小。す。き。ん。ま。う。一。す。き。飯。う。ま。と。肩
 を。仰。交。梳。を。ま。う。一。千。と。せ。眠。る。瞬。と
 艸。堂。小。松。ん。人。ハ。齡。八。十。八。乃。月。を。稀。ち
 可。家。信。念。ん。と。い。う。め。一。く。ま。の。ま。を。た。く
 示。一。き。ス

堅田ハ良茶
 生。地。也

支りも。う。そ。く。栞。の。音。除。と。う
 半日。お。ひ。乃。家。廬。ふ。一。た。り。う。わ。く。述。く
 弟。三。お。領。を。謝。と。う。ま
 大君。風。雅。お。愛。お。清。く。月。を。田。毎。れ。歌。を。む。え

清別業の花乃ありハる事小夢え。吾れ松石矣
 の行ふいよの葉はほりあり。蕙々の香ともを
 くして追し。遠きは是世乃のへとてあはれ秋津
 清福乃たつハいとを。け日いら成日花。家州鹿
 小恵みあふよもの三ツ。重む壺中子香紙合
 み。宇治の橋娘をかく神を度ひ。青苔目
 耳清して立田如喉を奪ふ。土よりよまやうあ
 ぶれもつううみ川ううよの仕くまひるほし
 清くく玉子れくはくけ小あや。一ツハ
 甲羞きハを押しはきて。唐く先極うくと

雲花ハ
 茶ノ一名

有さぬけ高く。後方の波を蹴きて夕風をさ
 きこて。名古るれさくも今ありまをさあり
 うく。雨の啼のまらたあけさふを。篠くあり
 と号て。徒宿よ。級をよまき。れさくを。ゆう。今
 一ツハ。きく。きく。れ。良功も。う。あち。れ。さく。斗り
 小風。れ。の。ふ。あ。う。て。お。こ。う。ゆ。く。誰。え。家。玉。の。物
 せ。い。ち。ん。や。去。乃。ふ。葉。れ。白。ひ。を。子。言。く。れ。ハ。磨。石
 現。と。甲。あ。へ。り。ゆ。く。さ。ふ。あ。く。神。ハ。秋。の。ま。ま。葉。紙。合
 炉。火。小。れ。事。い。と。意。く。く。を。傳。く。

才三 愛尊説

愛蓮華ハ
再るに流る

水の州。陸のむををる中。尔世人ハ花の姿もなるを
よて存ひて。唐此名を付ケ尔を如く。風を我をいふ
事。の尔外を割て。梅枝如せ。葉好ル人のむ。已
くや思はん。ぎと枝あり。に香風の遠きむハ清し。菊菜
と泥より出く。小倉城の朝日尔。た不き。夕陽尔。乱
を。天子を。お福く。あは。このとなりて。亭、榮亭乃
恙。子。袴。ア。ア。盃の數一盃。紫茶

妙子横川の
そとよま
もつた、秋

志中んさいの申。おくハ首。自。在。玉。あ。の。つ
お。う。ふ。す。と。ま。る。ま。き。の。こ。も。横川。た。た。く。尔。月。夜。也
と。一。形。こ。お。の。園。の。さ。く。さ。く。尔。と。む。く。渠。も。い。つ。ハ。お。を。き

葉のさぬ。初晴を不待曉の後を轉すも亦むくあり

才四 城西の坡。下。舟。を。流。ふ

日成。外。柳。花。い。そ。う。り。て。河。を。な。り。柳。絲。小。吹
く。水。波。静。なり。る。流。小。舟。を。舟。を。流。は。ハ。梅
得。て。風。小。舟。と。流。ハ。漿。小。舟。ま。き。り。り。天。流。く。草
し。病。病。こ。子。小。徒。行。不。を。放。み。て。酔。ふ。あ。り
ひ。芦。の。心。我。披。し。何。く。と。如。く。ゆ。く。袂。申。り。ね
す。も。随。え。つ。筑。る。波。よ。け。山。小。舟。る。る。あ。ま。あ。る。こ。う。こ
け。し。く。備。わ。り。ふ。耳。禹。の。神。を。祈。り。る。人。の。聲。目
を。揺。し。廣。き。う。り。の。板。を。並。へ。て。よ。く。あ。を。流

廣きふ相
文。ま。ま。の。あ
後。の。あ。は。し

文集一

二

うふ。骨切の石ハ山よりも重くなす業ハ無ふと
 ても軽し。比山絶頂ハ大抵へと母を乞ふ言し。
 千ねおむむいふ出る帆を道り。ちとり言唇
 卯のむれ白ひを配る。孤峯要と成て彼の解
 をとむ。固よ一世志切なり。志らも今安ク在
 や。おほや幸のほめくみ流うねハ長く家茂
 傳ふ平て下れねむいふ。母のしと。法
 彦の國くお着る積る船を子ラ以新ふ
 敵くの平志うく白く深思く画て。布張裁
 竹ふとさみ。ちと。城口を治せれ風流を

吹し。月小照りりをさみ。夜をく長くて。そな川
 どの價の値ををぬく。ふ川口乃いさほひ。
 大に回平の石ハ行して。百家今茶家の替
 ひ。こまはれ山より出し。月うらわしと。平傳りし
 と。ふ乃何とら。いへ。原津共ハ。あさく人々や。増り
 ち。哉と。おれ。うみ。原元。祥海。さハ。の。む。ひ。し。
 と。う。や。室。ふ。い。ぬ。う。き。う。形。く。小。舟。あ。や。し。
 く。解。を。た。ふ。と。り。て。と。家。へ。さ。さ。ぬ。比。信。也。
 花。橋。の。む。り。め。き。て。お。う。く。う。さ。よ。あ。も。
 あ。い。ん。整。婦。ふ。あ。い。と。鳥。毛。の。き。ぬ。あ。さ。か。

一ら旅はみ。結ヒき箱をすくひ。篋カネ空ふ
おとふひ篋空ふ飛入。篋カネ空を出て、私カネを掠
ぬ舟も飛ふ。ささぐれ神カネと。孤カネ獨カネ乃
東より西よりもさや。一嗚呼何人。嘻々
吾是旅志まう。おの祿カネぬ。海妻。舟乃改さば
や。ちきりを作ふ又川舟のうねやまぶさめ
せふわつるか。おすゆ。と。渠カネと。くち
忠や。ゆん孝や。ハあまぢ。放てれ。めんや
はくく。病カネぬ日。益カネあき。旅カネと。み。旅カネりふ
まう。く。己カネ小怒。惜。肅然として恐しくて

垂カネ屋
比五屋也

玉を摸り。一。字。おろふ。一唱のほ。かきとて
虎カネ此。柳。汝カネ。信カネ。ま。や。枕カネ乃。花

り。小。結。海。一。千。里。小。潮。あ。く。た。め。の。う。う。う。を。成。て
蛤。小。児。の。き。あ。小。橋。を。や。柳。然。真。旅。ふ。ん。と。さ。や。
酒。を。く。み。魚。子。者。を。投。う。ち。表。空。旅。阿。ひ。吹。て
の。本。あ。さ。う。形。り。と。楊。柳。を。折。三。子。ハ。早。う。京
に。功。を。さ。む。喜。日。限。り。五。天。き。く。く。く。く。ら
張。の。氣。ハ。武。原。山。を。離。し。あ。旅。志。旅。志。の。あ。れ。ハ
早。の。花。鏡。り。あ。て。扁。舟。綿。織。の。光。ち。う。一。是
時。甲。辰。三。月。三。日

吹面不寒
楊柳風

才五 雜話 盗人の禪

彼卓多其酒家多一。或或賊來て寢を
移しふ花を誤る酒花は這入るを好る自
移移ふを取打ぬ一初者枝くを埋之風を
鐘ををををををををの上ひをををを
小枚をををををををををのをををの
命れ上もワきれををををに沈酔と成りて生
祈なく柘枝を枕り熟睡一々々寢るを
日小移るき、覺て花より内を覗き見被犬老
下子健形あゝ男二十余人釣をををを

居あうれり盜人出んとすきと道存一也
酒桶司也 花はのり桶司とも花子来るへ一命を一寸はる

花一いつやいふと二丈を垂一樹を心を定め
荒縄を外ちを中して手ころの丸をを搜り也
一々々腰ふさ一尻をををををををををを
ををををををををををををををををを
喰あゝび居る大指のあをわき目もやうすま一
文字より大子をゆりてよい一々々急い一々々
をあゝくおふけけ振つてある男も移をを
これハ何とややんや是をををををををを

又盗人も目をつけずらむびまらぬいづくくと
亡る神静なり子をあり中戸を振りいで詔を
もえたりて死するも其時一命信玄の志を
も禪杖を銀念磨盤の空裏を走り換ソコふ
世盗り人乃丈夫を必をて去ん

八角磨盤
禪治也

亡国タルハ
司馬子期也
戦國策

中山ノ君ハ一杯の羊羹を以て國を亡る家也ハ合
子喰入る盗人を亡る事ありあこそん法
銀念磨不有佳境ありと昔吐ふ法く替之
第六 真岐州

再斯可也
夫子季文子云語

再斯可也ハ日く人の人の宝成へ一旬を結ぶ

詠
赤見内自
詠者也

この之種なりや。入る山のそら月の影ふ噴き
の傍。四ノ子つう。詠るの風色ぬらん。元文。季の秋を
しめは。墨よ。し。子。請。信。中。臂。噴。咽。あり。杜。府。も
おは。林。 中。の。中。く。久。く。神。こと。し。あ。り。て。例
有。信。者。と。静。如。く。信。内。者。若。く。人。内。を。正。と。い
古。を。今。一。新。意。を。信。を。と。り。云。を。信。子。あ。り。ハ
腹。菜。を。解。ん。其。句。ハ

故ハ絶く波を極や柔乃有

むは
世の波乃くは是留りて花子銀もあまや。柔に
うりり。九日れ夕はう。秋の静の昔くも。静

任長の休証

文集一

十

は先てさう句はさうやと尋ねた。予云
ふ可也。げ日の句やさうの月と云ふも人も稀なり
あゝ世を世下丑文をを家よめよ。たさく十三
夜の月よ心ひよせ。兼のまを心ひ世よあらん。
後の月よ菊や月とを結ひさう一句。往昔と
つ。蕉翁よあつた。ちよくさうさハ。 富士の細の
新米とかきうありと。土紙ハ。若く無入ぬ
月。訪ふとに。う。作配あや。ねとむき。杜府
来く。几。迷。又。眠。く。は。さ。く。お。向。を。め。く。被。さ。る。樹。十。三
日。朝。 後。有。る。兼。此。自。書。式。と。云。兼。大。方。也。類。一。と

富士の細
西の山
み文をさく
仍み下丑文
さうさくさう
けく兼あり
字力の余情
あり

世間有真味
欲弁已忘
言陶淵明
句

九夜十日
九夜日よ
十日新治
筑時
連放

丑文さうさう。む。若くして一折。痛。い。を。み。便。二。折
ま。つ。れ。さ。う。う。わ。さ。う。何。そ。三。思。よ。さ。う。う。世。今。時
連絶の境。六十一。ね。を。先。て。用。さ。り。世。人。之。連。絶。此。を
列。は。只。句。の上。中。一。て。軽。交。痛。を。あ。真。味。凡。流。く
ハ。く。欲。辨。下。已。忘。言。神。を。祈。り。古。後。よ。さ。う。て。
丑。文。を。成。並。深。く。も。流。の。句。後。造。り。あ。つ。た。
静。子。お。も。ゆ。り。く。八。世。奇。の。連。人。有。り。十三。夜。よ。兼。を
む。す。ひ。て。一。句。成。形。さ。ハ。天。下。能。吾。を。識。ん。と
九。夜。十。日。の。首。を。サ。う。下。よ。し。て。一。句。を。採。り。用。於
此。的。有。に。あ。ん。ん。今。十三。夜。い。の。ふ。く。と。を。さ。う。書

文集一

十

照つうか
平家お殿
のこころ

謝云自有

東山妓金

屏笑坐如

花人 李白

あそびもど

あそびもど

あそびもど

あそびもど

あそびもど

あそびもど

あそびもど

らま。たもかこーも好くさうらり。幸子十四夜到る

清光三秋れ付をけりて 照つうか。びんごの

おまり。香きく拍なりて笑坐如花人と田み好く

一まのなみそくきに遊み事々 あそびもど乃

はとひま、まもも。上達アとさこ申被と。わりやうふこと

おれま一考好るハ。先とあまふへうなり。老若はくと

海一うけいせいもふ目もすきぬりはとも不事さ

民のほのなつき、 ちこことうれそまう那や

いづく人おも宛サや。すみよーのるはくとおれひさ

んふ一白な産産くくサと

あそびもど

あそびもど

あそびもど

あそびもど

あそびもど

あそびもど

あそびもど

あそびもど

あそびもど

あそびもど

あそびもど

あそびもど

あそびもど

あそびもど

あそびもど

あそびもど

あそびもど

あそびもど

あそびもど

あそびもど

あそびもど

あそびもど

古人二秋志くぬ一秋乃月

後ノ志通字孝言後ノ知彦輔仁親王十三夜乃月をば

一先て秋ふとひと母十四夜乃月を今文はくと

例のねハ一く好く一里第ふ。頻りの日皇都山振秋好し

らう。むれそと昌迪十三夜乃月ととく聞申

後なりと菊子老や一夜すの月

清ふおくろきさつふ奇好り。志とく胸ささるひ誓

うよおろくと袖を志老後。連絶の院今日家ねふ不

おあさまうけへ里六の時絶唱佳作をすくる。北路の神の

伊教よおひさまね。河子秋秋をて好うらねらひ也

あそびもど

あそびもど

あそびもど

あそびもど

あそびもど

あそびもど

あそびもど

伴登り古木とたれぬふねううほよ親を言乃
 益も世下ふと志きりの日暮れ杖杖と送りかき
 侍り一月。玉は雪の事返さうれ家はやん屋
 うつてそとてたちをを。樹一姉一此志と。謙ふ
 短交不ぬあううとくうけ引き多へや。無上の道
 を欲く不思名利との一終ふ忠侍時の書書。
 けと一八九の書状ニツ斗も。さうしてもさる屋きむ
 とみちの却々ううやまの白ひをさうら抱ひて。
 たのはううの高徳。頼りぬるうれ。人懇人志さひ人
 侍人ちう。人ともうれおく。何そは希ても

五文字
 昔之し
 古語

矩を諭を成るや法の龍衣

かくも一雨人。戯を本来よゆううをて
 四半の老人す付。危ふね呈ス

才十 春日旬我帰ひ一人乃とて人馴ふ

免傷恐ノ
 字ハ北山法皇
 ヨリヤ同ト形
 老ラ世三ハ
 確ク世多ハ
 を九ハ

才十 春日旬我帰ひ一人乃とて人馴ふ
 うたう侍る人の林ありううさううあう。其六本六
 七本管結老の枯す家以而ひ。世老ハ法以かう
 志海うう。堀出せ控うさる古うか。也山一く
 海く結う。まうた其後魁をるあうさ。ん家
 才十 春日旬我帰ひ一人乃とて人馴ふ

長も。牙ハ一ハあさる子かくもいふ一ハ取竹くの牙
打拵へ綿細乃襟衣はうぬ。或ハ時人の筆を倒サカ
一ハたき如一ハさる家頼ひ。種先キ取替ひハ乳ハ
あふりうく繁ハ成奪ふ乃いりあり。卧てハ種ハ
之は角う。於ぬ一ハ取うれあり。おみおほし
里り走り来りて。大や。口うちとんぱされおせ
めと。波さしくと引放てハさくあや一ハけり光
里。いハ成娘之生出んと思ふなり。廿下みりん
いとんひく道。いさ子とめりふあさんとりあり。
うと切敷一ハくあち小釣瓶と名つけ。糸ハ繁

龍筒ノ
一名龍牙
トモ云

いんち
竹を打
行

取悉ハ水取とり。きち平汲とる。糸をぬく
すあさけ此むう。さけれ子の流るまも今も
はりなりや。あさう一ハく刺さるハ皮打をきてぬき
一ハ取れハ。沖中川乃り細きね成淨ふ。な平り
融をりて七孔をあへ是成吹一ハぬハ。海成き葉
ハ音お教りてさる。岸の枯葉を拾へ。考をいま
精列おねめハ。表れ目短く。杖取ハ又明やとらん。
流るく考娘ハ。かハ。はさる。さる。はさる。あはく
ふふも。信よを中不教め。さるや。いハ。無君
のおい。それをも納りて。穿ち給ふと申く

馬鞍笛ヲ
能ク吹

考娘ハ
父母也

土御門内大臣
時宗の三女

又集一

平家通隆の

珠成ゆきひ

斗の能書子

らせたすよ。或

侍うひあひて

あすあつて

幸さけ

あつて

御名宗と忠

又あつて

とあつて

給ふようこそ

ひら。そのひら

けおひひひ

そと。灰成子

そと。くすく

とれひひひ

あつて。ひひ

らひたす

の山乃奉れ

故集一

分扱志々め信ひをみよし玉付徳神耳取世の涉
 う〜に内府云ををち小賣たまも折あ〜んく
 との御言も年ま〜り。時なり時よ〜し切つ法親
 子やあ〜んいの〜を給ふ神風の吹り〜後る日如
 能ん〜。古〜おとむきと〜けよさ小奏國深く
 と御了ゆ〜あつて家みつ〜志〜め信免祈して
 抽〜多難〜と〜と〜奇の教〜御前よ〜あ〜し
 た〜あ〜ん〜。天機をれ〜〜〜海と小奏持の
 りのぬ〜を〜さ〜さ由聖の白ひとた〜と
 の水〜は常の外よ〜と〜ふハ教す〜か〜んや

と院宣ゆ〜色〜れハ内府云ふも氣〜卷〜る〜眉
 意〜お月希〜して和親の侍を〜あ〜ん〜ん
 け〜身志ろ〜慈〜て〜う〜ひた〜ん〜あ〜ん
 く御説有〜事の約〜い文ま〜れ姿を〜て〜も
 うた〜あ〜ん〜。御ハ〜斗院宣あり〜給〜と〜い〜事
 已〜ハ〜〜〜法〜み〜あ〜て内府云〜野君
 へあ〜の中〜作〜入〜ま〜れ〜ん〜と〜あ〜も〜あ〜て
 一〜〜あ〜か〜〜有〜〜と〜ん〜と〜ん〜他〜年〜後
 續〜日〜減〜換〜日〜小〜弁〜す〜て〜詠〜奇〜し〜他〜事〜の〜意
 下〜た〜〜も〜也。奇道の言き事今程お望〜と〜

歌ふむ節とあきううふあうて秀うう一そと
 疑うは海といひ山屋春御恵になうとア給ひ
 一とやんのおおとむけとまき人のまな家相
 なるへし。と智れあうまのやもかろ。逢久一た
 柳古名人旦那の外せもある中一た平やとた
 こいすふけううふ歌いとさうハ余りたりうう
 とて茶錢振うとらと笑談有う
 一節云常子坊とよふ空煙のまやう成ワうせう
 時四角は見え子と割て四面に割層志うう小坊と
 とも配當さける事常あり。或は新集の少此か

此本はれと作らまうれを一大本の御用とら
 と御次を玉四角に割く四面のより層微塵も数
 らと尺割とる本の側はまきを清茶へ山寺は
 御機嫌を換して心うく切れとさのむさねは
 あそ侍は法くも坊とともう割く指あるふかや
 うの茶茶茶とくふとるあう一籠をまおこの
 どのなる。坊とも切あくと割直せとある時制の
 夫とく割層我配常一とう片うた正とうう
 見とくれは是とと作あうて監思惟一たまひ。知
 の人裁りて切れとく遠ふまはと尋給ひまれ

之。如医者了々然ハ坊之庭ハ肩成包置之次ノ
 御用ニ寄入レた之致ニある御新業ヲ律義
 其法ニ肩と見カシ休事ハ次御用ノ心ヲ到ラ
 さすコトアホ笑ク俗たす也。新業成ルテ坊之
 ハ肩成置むトある古人も竊書ト書ニ書信
 責るふ不及家ハあやうと御機姫おとりに
 一ハ切りたる也。御新ノ道ハ功運ある
 とおとひ信す

一昨君之頃香阿弥動カク肩成也一信ハ御
 用度ノくハ信有る也と云々其阿弥武陽東師子法

らあり云武の御機ちうくまはる老母人懐の高
 低ナレたまふと云々一断人平てと云後
 言信老と世人を也一我も信うぬ信是者と
 叙夕奪里たり。又武は太師御立園の時ハ世との御公平
 叶ハ御机也ヤあり如。有時御自機の内との好ふく
 祝成を伴竹節のもヤノ花鳥れ白ひも肩成也申ふ
 ねちの山並川の侍ハをえたる筆れ行ひ。御機姫
 影りみまぐれく。幼たのをわいさきと其方今古く
 名人と世も譽らる人くおとりに感んぬるなり如
 御机并れり言外字儀うぬようそ御意有か

何そ渠亦う廿益の理我あつへ側小是事きくな
 く足敷ふ心むさくてはうふめあし。世度乃石第ふ
 て三年をうりも他の事あつて後世致りなるとして
 了せり。然るに抱好も真首へ。たぐさみくもんよ
 うん利欲外と云道具も居るふたりの推言
 の一言をよめてか入法とあよとア何うと我信も
 多。勤たつすこく京へゆり心を法あり。誰我刺さうり
 のおもしろきまともを非あく。如波疎唯へまうり。然て
 時そ町人の言信とおもしろまふらる。何のやくも
 り。若下早うの中ふていひらちたまひからなり。とこく

生後希目あやちつう。然るのハなり。ち跡君ハ貴人
 の貴なるもの。侍事あうり。かく斗れ赤面とねと赤
 面と云も中。懲りて我を家とねとあうり。額小
 汗もあふれなる。何れ御水入あうり。内外不立と御
 波へ頼り。三まをうり。経る。御教先我はてり。の
 こと。御教先我はてり。の。源氏知り。あうり。跡君
 へ御教先。あうり。と。赤面あり。源氏知り。と。赤面あり。
 中より。定て。不我の。跡唯。あうり。あうり。傳り。あうり。と。あうり。
 せと。字傳り。中。あうり。と。暫く。ため。あうり。あうり。あうり。と。
 たく。やみ。あうり。あうり。あうり。源氏。あうり。あうり。あうり。あうり。

不致双なるは清話もあれうしき阿らるる白ひおへ
そのころい常平心けききたるの也。〇又つうへ
おとちておとひけあきさいのやうなるも
とおほりしなとていそまへそふぎのくし
よれへきなありやてそひ終ふ後と人の心
をんやうよんえは作らるゝとて中おふくむ
たゝあふ定

然候て貴人の怒りハやあ安かへー況や風雅の
君也りきた程

一白居易の子をさしたる枕子疎る業茂うむと
況より白氏文集心成法をて見傳りたる事似る
るも如しいあり多かるふ有事やんい極
一今生被てお成はふそあハ急好并謡乃作者と
るハ嬰児も常平口すさむ事ありけ外と留り
中興の祖と云大聖説經ううとくハ加賀極と云
の指取をば播戸及び義友史後統後と云者也其末
流との率章の工史凡骨所詠まゝ志りも中意と流
をを失はさるるの掲焉あきうのや
一芭蕉翁就中お成つるへー是ハ芭蕉乃才子と云
てををうりて女を成失ひ芭叟の正道成たてた

幸利を得る可御あり。通て力有連中も芭蕉風
とかやうのものとおとひ^{ナゲ}泥まうくそ。是非なき境
也。蕉翁今来らてみつう一度を失ひ命死せし

横鼻禪
フントレ

カ十三 横鼻禪を答る禪

児^ノ夏
良運記
又へタリ

比叡山の児れ久しく里長く帰るるり。これ老
師乃とやうり七月七日編六尺七寸^{ニヤク}を如子答るる

もろくく^ニと星へき^ニ奇^ニ横鼻禪を

日枝よりお詠は^ニ流乃^ニ去る系

と詠く。授乃細布を答るるると我。元感るる思
ひ合せ承か一日の中も陰陽をうくつて

悟

國氏の帯なり。既ふ悪く下ハ白キとそ。あうハ
世に志るところを。羞子^{ニヤク}おるそり。惜哉。文花
の二ふ。文を破るの徒あらん。おれ包ここれ
くそめくそく。法用ひと。貴人とも。お二きち
めんハ。瘡を生じと。國指中。せも。さ。これ。相
のば。をむす。いたり。

オ十四 陸奥旅宿へ答る文

明長。昂傳。い。急キ。あ。け。ほ。う。ハ。毛。月。結。念。こ。心。子
く。そ。今。知。る。所。な。ま。

京。海。子。共。小。杜。ひ。共。小。雅。波。子。う。う。百。た。く。散。花

白酒初熟
山中歸
李白

ふまよて。甌上障なく草庵の志る酒熟さる小
間如く。吏を候きして阿波の玉手わたり。大和後
や古き酒熟るく皇都子出き。とやうり武陽小
神のこころも志るをむらさき遠し。と人
はんあうころのたれむき。焚りいんくく。持雨
もあうりれ。持後て今夜とあけぬ酒とも多
のたまんと。か乃乃忠の事ぬも。うみぬ乃ん誠。と神か
とひ定て

恙くハ脱忌日額一 糺給

まじくあひぬきも存るる良奥へ進めて氣

必由尼合後くあまこまぬへう

九月廿七日

るー 西を中ハ柱八子あり 柱ハ

実俤ふハ後くもあま 入ぬ西ん坊

ととりー ー

廿五 紀陽分樹亭子抄ふ

本清まよ
王右軍詩
分樹林寺
板女強盗記
仍友与二
換結心有

分樹本清まよ 予あうに年有り 記後の方及ひ
成流る流るれ日交し 抄ふ愛をくもぬく 抄ふもた
記小屋のまよあれ 俤れを孕み雨を合む 此うま
まろ風の白ひハ各 君恩有る君恩風よりもま

ワラの浦ハ
あくろ人の
子乃御仲
十もへふも
原塔うく
ら
後九条夜
山

乃吉戸
老杜カ句

南よりおのけうく 庶人の意し 北風吹来りて 四時
程よく 一をうく 口はうく 好は九条く 内府之
をさみきぬひー おほくの人は 字の海と 原塔く
とのみふあるー 此このみ海あさー して 灯を反とー
朝衣を揃して 生涯を下なる 如風情 筆をえて
ゆりをうく 枕乃 昔序とー して 才を睡 なるえさあは
飛せり 龍は 勢う かなー あ乃 輝

才十六 筆秋をさる 志とる 世ふ

雛の家位之 今世の一婢 一ハ 蕉翁 菘菜 杖をうく
一 龍と 雲は 名跡之 々々 院は 悟の 芽を ちらう ぎ

羊之 名
龜く 杖衣ハ
二おを 王から
おの 用紙
宗之
其後 くと
ちふ 古にラ
ま

やうに。香福庵 筆秋の 初紙 柳ハ 刺 弁よ とうー 此
うう 山ー ぶ 出とら ぬむ ー ぶ 出とら ぬむ 龜の 儀
と 号け する 家 古 院を 通る 是ハ 志 此 院 する やう 筆
居士 衣 吉 儀の 中山 おく 能 細 及 六ツを 隠ー 筆
との へ 松 塔の 潮を 洗 了 象 後 後 潮を 一 立 此 破 乃
香二の 答 於 夕 响 妹 齊 山の 暖 昔 今 折 む 其 衣
て した よ お ー 海 き 長 途 なる ー んと ー ぬく さま
ゆ

京へ 疲て 玉 巻 草 戸 也 死の 歌

昔 享 保 十 六 年 乙 未 三 月 下 旬 空 雲 け ー 山

大王ノ夙
又宋玉カ
言ハ

カヲ見蝦
骨ヲキ
みカモ
信ヲ玉

又六ノ好ヲ教スヘクテ若クノチガハニ柱ノ幸
能ハルモ世も教リ行キ消ヘクハ至効夕の信ニ大
王の風も一カハ海ありハ陋窓ニ吹来テ病を愈シ
精を寧^{ナマメ}ヨ。日の日能日も多クハ能一死^シ能^スモ
カキ力カヲ蝦^シ骨^シあり^シみ^シと^シ長^ク唱^シ講^シん
キ^クキ^クも^シ愁^シニ^シ死^シ生^シ卒^シ行^シて^シ長^ク月^シも^シハ^シぬ^シ先^シ也^シ也^シ
も^シ信^シク^シ形^シク^シ也^シ

撰^ルル^ルぬ^ル身^ル月^ルハ^ルぬ^ル蝦^ル 小^ルキ^ルウ^ルも

列^スも かん^スを^ス能^ス海^スあり^スれ^スち^スの^ス片^ス端^ス子^スの^スき^スウ

と^シ控^シハ^シ海^シニ^シナ^シク^シあり^シ右^シに^シ形^シク^シナ^シク^シ一^シ松^シ一^シ栢^シ玉^シの^シ臺^シ小

蝦^シ皮^シ海^シ
信^シ玉^シ

百川朝水
之文丑季秋下

昨ノ居士名一
ナリ比燕寺
朴道禪修参ス

淡々百川朝水居士木槿窟小記之

才十八家天子狩示教

詩^シを^シ信^シ長^シ刀^シ 和^シ秋^シハ^シ刀^シ 是^シ奇^シを^シ振^シ差^シ 詠^シ信^シを^シ
相^シ也^シ也^シ人^シて^シ能^シ刀^シを^シ利^シ遠^シク^シ見^シれ^シと^シる^シす^シや^シ能^シ也^シ

寫^シ氏^シカ^シ能^シ
小^シ原^シ公^シを^シ裁^シ
左^シ傳^シニ^シ出^シ

一^シ棧^シを^シ信^シを^シ定^シめ^シト^シ得^シん^シ時^シヲ^シ至^シテ^シ至^シテ^シ功^シ取^シル^シ寫^シ氏^シ
館^シヲ^シテ^シ信^シ云^シを^シ裁^シ一^シ荆^シ軻^シ兵^シ始^シ定^シれ^シ孫^シと^シク

寄^シハ^シる^シ也^シ此^シ時^シ信^シ長^シ刀^シヲ^シ以^シテ^シ一^シナ^シク^シテ^シ側^シヘ^シル^シ事^シ
ナ^シル^シ海^シ一^シ能^シ刀^シを^シ國^シヲ^シ中^シニ^シた^シま^シん^シニ^シ信^シ一^シと^シ能^シ取^シル^シ
ハ^シナ^シ一^シと^シ也^シ此^シ時^シ秦^シ王^シの^シ佩^シル^シ劍^シ能^シ長^シき^シト^シナ^シリ

ちよ撥事阿とらと其無且う茶囊たくと別
終るへー長たとて頼まわと恐るへー能うは
ぬさ心を定めしむる藝道何の何をわとるなり
唯見性多しう其的教指正へーあしく用ふ全
流俗ハ早俗はるる斗はやー嗜て言記ふん
を是て非此の教へ偽朝の道なきとむへた如
りされん中真流道と祀衣喫社と貞徳寺吃
芭蕉翁其角引下て洒衣着て道統多り時今流
は令此様押ふ必を以業を以ふ悲格并家親之
舊例式新古式本式及廢賤之令指との三つ物

撰集並若古式と今古よく教へ上志能く慎む
ちよ遠慮のありと他門よりより正統者へー不
知るたふ端の凡余る程を教へなまは。中流
と外を有る姿あり。序後并撰者之志流言
月流わたりとくも不文の志志又孝もまは
流とる句是一句禱の禱法也ー其の禱水か
坐の句神尾流はとるも其かは母流く
うんや和ら竿秋へ凡領と譲りし時をさく
のむの言や下流りし其言の禱を言の言
禱とわたりとる也流りし也言乃。人來くると

とらふとくは一通乃は清曉梅咲冬暮る夜
林のほととちをいふみ出るうとく未だかや
栄へたまへ

まのしる

~~まのしる~~

清文集巻第一終

